

歴史改蔵シリーズ①

絶望を希望にかえて、立て ロベスピエール！

ヤコブナラ

# ロベスピエール先生

時はまさに18世紀末の救世主伝説

朝に道を聞かば夕べにギロチンドロップも可なり  
謎ー革命軍に対する反乱軍は正規軍か？  
シャルロット・コルデに兀タッチ

ダントンも呆れるカードゲームブック  
実はレッスルエンジェルズ本！

フランス革命とマイティ祐希子を  
愛する市民に捧ぐ痛恨の一冊！！



びよびよロードショー・場末街

## レッスルの三色旗

（二等市民物語）

前田 播磨守

（一序）

「フランスって、あのフランスっ？」

茶色の瞳をまん丸にして驚いている娘・永原に、俺はゆっくりと頷いてみせた。

「あ、あの、パリのフランス？」

「そうだ。フランスのパリだ。紫紺の長髪が美しい少女・富沢に、俺はこっくりと頷いた。

「で、でも、パリなんて……お金、大丈夫なですか？」

トレーニングウェアを着込み、手に竹刀を持っている娘・越後が、頬を紅潮させて俺をじっと見ている。

「じ、自分はバカンスに連れていってもらえただけで十分に満足です。パリなんて、そんな贅沢は……」

頬と口元をヒクヒクさせながら謙虚な言葉を口に出している彼女だが、喜びを押し殺しているのは表情を見れば丸分かりだった。いじらしい娘だ。賞賛に値する。

……俺なんかよりもずっと。

彼女たちはよみがえった。リコール・トウ・ライフ。

そして死んでいた俺の心に、再び火を灯してくれた。

リコール・トウ・ライフ。

だから俺は立ち上がった。

しかし、うまくいかなかった。経営は破綻した。だが俺は、四人の娘に解雇通知を出す前に、どうしても彼女たちに礼をしたかった。漫然と死を待たただけだった俺の人生に、再びつかの間の夢をもたらしてくれた彼女たちに、最後のバカンスを送りたいと願った。

この世に神はいたのだろうか。願いは叶った。俺は事務所ドアを、ゆっくりと、大きく開いた。

その向こう側は、革命期のパリの場末街だった。

「今朝からだ。ドアの先がこんな風になってしまっただけ。つまり……戻れないんだ、日本に——現代に」

唾然とする三人の娘。俺は四人目の娘を見やった。

「……別に」

赤いリボンの少女・武藤が、ポツリと呟いた——。

## （一、旗揚げIIフランス革命軍）

いずれにしろ、衣食住の手当てはしなければならぬ。住については、事務所です足りるだろう。仮眠用に毛布を置いていたことが幸いした。衣は……いま着ている服とリングウエアで我慢してもらおう。だが食は……致命的だった。夜食用のカップ麺が数個。これだけでは育ち盛りの四人の娘は、早晚餓死してしまう。

ならば……働かしかなない。

俺は、革命期のパリの街に一步を踏み出した。この一步は月面におりた宇宙飛行士の一步よりも価値があるかもしれない。だがその時の俺には、歴史ファンが感じるであろう夢のタイムトラベル的な感慨はまったくなかった。ただ、今日どうやって俺と彼女たちの腹を満たすかという不安だけが心を占めていた。

だがそれは、どうやら杞憂だったらしい。

驚いたことに、言葉が通じた。でたらめだ。だが、俺のいままでの人生自体がでたらめのようなものであることを考えると、いまさら驚いても仕方ないのかもしれない。ここは素直に現実を受け入れることにした。

現実を受け入れて、彼女たちの興行——女子プロレスの試合

も取り付けてやった。その興行は「ラ・ジャポネーズ」と名付けられ、パリ市民の関心と呼んだ。

でたらめだ。だがこれも彼女たちのためだ。

「あたしのリングネーム、ジャンヌにするねっ！」

茶色い瞳の娘、永原ちづるが元気に俺に告げた。悪くない。

フランス風だ。俺は彼女を少し見直した。

革命政府である公安委員会を訪れた俺は、女性的な顔立ちをした若い男から、興行の会場は革命広場と告げられた。その男が革命政府の中核メンバー・サンジュストだと俺が知ったのは後のことだ。彼は俺たちに食料を届けてくれる手はずまで整えてくれた。フランス革命の精神をジャボン、つまり日本の市民に伝えることがその条件だった。食料のためだ。俺は承知した。いざとなれば、富沢に三色マスクを付けさせてフランス仮面にでもすればいい。

そして興行の日がきた。

「革命広場って、コンコルド広場のことだったのね」

富沢が眼をキョロキョロさせている。かくして、俺に連れられた四人のレッスル娘は、群集で溢れている革命広場の真ん中に据えられたリングの上に立ったのだった——。

## (二)、ジャンヌⅡ永原ちづる)

広場に集まりリングを見上げている群衆の多くは、小汚い姿をしていた。場末街の酔っ払いのような輩も大勢いた。そして、花の都と言われたパリの革命広場は、異様な臭気を帯びていた。

それでも彼女たちは戦うのだ。いつでも、どこでも、誰とも、そこにリングがあるならば、彼女たちは飛び込んでいくのだらう。

「いづくよーつ、ジャーマン・スープレックス！」

リング上では、富沢の背後をとったジャンヌⅡ永原が気合の入った声をあげた。俺は嬉しくなった。彼女の元気な姿をまた見ることが出来る。これは無上の喜びだ。その永原は、富沢を持ち上げると背を反らし放物線を描いて一気に頭からマットに叩きつけた！

「おおおおおおおっつっつっつ！」

群衆がどよめいた。激しく、激しく、革命的に、激しく、激しく、激しく……なぜか彼らは怒っていた。

「アルマーニュー！ アルマーニュー！」

「ギョティヌ！ ギョティヌ！」

彼らの叫びは、雷鳴のように革命広場を包んだ。その言葉の意味は「ドイツ！ ギロチン！」。

「困りますね。この広場で革命の敵国であるプロイセン、つまりドイツを賛美されるなんて。ジャポンの市民よ、これは救いようがありません」

いつの間にか、俺の傍らにサンⅡジュストが立っていた。そして彼は部下に指示をくだした。

「いやっ！ 何なの？ カウント3はまだなのに！」

リング上でジャンヌⅡ永原が公安委員会の連中に取り囲まれた。そして何人かをぶん投げた後、失神している富沢の体に蹴躓いて転んだところを取り押さえられてしまった。俺はそれをただ黙って見ているしかなかった。

「四十八時間以内！」

リング上での即決裁判。罪状は大勢の市民の前で革命の敵を称える技を披露した罪——反革命罪。

そして俺の愛しい娘である彼女・永原ちづるは、ラ・フォルス監獄へ投獄されてしまった。

彼女の助けを求める声が、まだ俺の耳に残っている。

俺に残された時間は四十八時間。それが彼女がギロチン台へと向かうまでの猶予時間だった——。

## (三)、ジャスティスⅡ越後しのぶ)

俺たちのプロレス興行が終わっても、群衆はその場を動かなかった。柱とロープが撤去された段上には、その代わりに禍々しい処刑道具が据え付けられた。

「ギロチン。ロベスピエールの剃刀。」

やっと思つた。迂闊だった。俺たちの興行は、ギロチンによる公開処刑の前座でしかなかったのだ。

「ギロチンって、あの手品とかでやってるアレ？」

失神から立ち直った富沢が、珍しそうに台上を見上げていた。そこに馬に引かれた大八車に乗せられた大勢の罪人がやってきた。そして処刑開始。

……テレビの手品ショーで見たことのある土下座をするようなユーモラスな格好で罪人を首枷に嵌めるギロチンとは、現実とまったく違っていた。

縛った罪人の体をピンと伸ばして台に置き、そのままスパンと刃を落とす。それはまるで……、

「まるで大根切りね。ギロチンドロップの参考にもならないわ。むしろ延髄切りかしら……」

気丈に言い放つ越後だが、まだ十五歳の彼女の体と声はガタガタと震えていた。俺は彼女の肩をそっと抱いた。娘よ、

キミは俺が守る。

たとえこの現実がでたらめな妄想の産物のような世界であっても、キミを愛しているこの気持ちは、俺にとつて紛れもない事実なのだから。

「で、どうするのよ？」

武藤めぐみが、俺に問いかける。彼女は永原が逮捕された後の試合も淡々とこなした。公安委員会が用意したヒール役のレスラー——シャルロットⅡ「コルデ」の打撃技をもともとせず裏投げで葬り去った彼女。いつから彼女はそんなにも無感情になったのだろうか。俺はキリキリと胸が痛むのを感じた。

「コルデちゃんの水着を剥こうとするからよ」

富沢と越後が白い眼で俺を見ている。俺はただ、メインイベントで負けた選手の水着を剥ぐというルールを粛々と遂行しようとしただけだ。彼女の水着に手をかけた瞬間、胸部に

「掌底（技名・マラー殺し）を喰らったのだ。」

「で、どうするのよ、永原先輩のコト？」

武藤が俺の顔にじつと視線を注いでいる。

明日には、愛する娘・永原ちづるの首が、大根のように斬り落とされてしまう。俺は、暗鬱たる気持ちになった——。

#### (四、レイニ富沢礼子)

異様な臭気を放つ革命広場を後にして、俺たちはサン・トレノ街を目指した。とにかくあの耐え難い血の臭いから逃れるため、そしてなにより永原ちづるを助けるために、娘たちも足早になつていた。

サン・トレノ街にある指物師の家が、俺たちの目的地だつた。そこにフランス革命政府の首領・ロベスピエールが下宿している。大家である指物師のおかみさんは俺たちを警戒し、結局、俺と富沢の二人だけが中におされた。

「ううっ、ドキドキするう」

好奇心の強い富沢は、目をキラキラとさせている。おそらく俺のほかには彼女だけが面会を許された理由は「一番弱そうだから」であるうが、そのことは彼女には黙っていることにした。

そして彼はそこにいた。鏡に向かつて、俺たちに背を向けて、一心に髭を沿っていた。俺は彼の背に嘆願した。可愛い娘・永原を出獄させてくれと、懇願した。

ロベスピエールは、俺の言葉、いや存在すらを無視し続けた。俺は耐えた。だが、もう一人の娘の紫紺の長髪は、怒髪となつてすでに天を衝いていた。

「失礼にもほどがあるわ！ これでも喰らいなさい！」

いきなり富沢が動き出した。ボディスラムでロベスピエールを床に叩きつけてから一気にサソリ固め！

「……キミはそれで私を説得しているつもりか？」

「お黙りなさいっ！ 独裁者め……ああっ！」

ロベスピエールの足が、富沢の手からスリと抜け、そして逆に富沢をステップ・オーバー・トゥ・ホルド・ウィズ・フェイス・ロックⅡSTFで捕えた！

「キミのやっっていることは抜け穴だらけだ。私が完璧な論理固めをお見せしよう」

顔面と足首を極められた富沢は、今日二度目の失神状態に陥つた。ぐったりとした富沢を仰向けに横たえたロベスピエールは、しかし容赦なく、鏡台の上から飛び降りて彼女の首筋に足刀を叩き込んだ。

「ロベスピエールの剃刀ギロチン・ドロップ！」

「革命を指導するためには、恐怖が必要なのだよ」

最高存在と呼ばれる男は、緑色の眼鏡をかけ、さもくだらなそうに富沢を見下すと、顎で俺たちに出て行くように促した。俺は悔し涙を堪えて、独裁者の下宿を後にした——。

#### (五、ジーニアスⅡ武藤めぐみ)

指物師の下宿の前で、武藤が爬虫類のような顔の男と話し込んでいた。俺たちを見ると、男は話を切り上げ、富沢を背負つた俺に目礼をして立ち去つた。

「明日、テルミドール九日が決戦になるつて。フーシエさんが会場入りの手はずを整えてくれるらしいわ」

武藤が淡々と告げた。会場は国民公会議場！

独裁者め。奴はマキャベリを知らないのだから。君主は愛されずとも怖れられるべきだが、恨みを受けることだけは避けなければならぬのだ！

「やるわよ。あなたがそれを望むなら」

武藤が小さく呟いた。彼女の赤いリボンが革命の色ではない。それはルイ十六世を断罪したときの民衆と同じ、怒りの色だと思ひ知れロベスピエール。

……負けたら死ぬだけさ。俺が。彼女たちと。

※

テルミドール(熱月)九日、議場を混乱に陥れたのは、愛する者をギロチンで失うことに恐怖した二人の男だった。

「奴が倒れないなら、俺はこの場で死んでやる！」

愛人を革命の牢獄に奪われた男・タリアンが、手に短刀を持ち、サンⅡジュストに組み付いて乱入を阻止している。

「行けっ、レッズル革命の女神よっ！」

娘を牢獄に捕えられた男、つまり俺が叫ぶ。

天に向かつて、祈るがごとく、未来を信じて！

「たああああああああっ！」

空から、天使が降ってきた。両手を翼のように広げて、自由によって、ひたすら自由に落下して——、

「ぶべっ！」

——自爆した。武藤のフライングボディプレスをひらりとかわした革命チャンピオン・ロベスピエール。しかしそれは、天才・武藤の欺瞞、策略だった。次の瞬間、ひらりと舞つたV字脚が独裁者の顎を捉えて粉碎した！

最高存在・ロベスピエールの体が、カクンと崩れ落ちた。

《V(ヴェー)！ ヴィーヴ・ラ・レボルシオン！》

議員たちの勝利の唱和！ 俺たちは独裁者を倒したのだ！

「やったわ！ やったわ！ ねっ、見てたでしょ？」

興奮している武藤。やつぱりキミは明るくてお調子者のほうが似合っている。未来への扉は開いた。さあ征こう、僕の

好きなレッズルの娘らよ。いつまでも、どこまでも。(了)